

ショスタコーヴィチ (1906-1975)

交響曲第5番 二短調 Op. 47『革命』

ショスタコーヴィチは15の交響曲を残した。『革命』の副題でも知られる第5交響曲は彼の波乱の生涯と創作活動の諸問題をも体現する代表作である。

1936年1月28日、ソ連共産党機関紙『プラウダ』に「支離滅裂にて音楽にあらず」という記事が載り、ショスタコーヴィチは新作オペラと作曲姿勢を攻撃される。これを危機と捉えた彼は翌37年4～7月にこの第5交響曲を作る。十月革命20周年を祝う12月21日、ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルがこれを初演し、大成功を収めた。自伝的な意味をもつ「抒情的・英雄的交響曲」と本人が語ったこの作品は、本心はともかく、批判への誠実な回答として当局にも認められ、彼は名誉を回復した。

第1楽章（モデラート、二短調、4/4拍子）は、ソナタ形式（提示部→展開部→再現部）で構成される。冒頭の厳かな掛け合いとそれに続くゆっくりとした旋律が第1主題。その後、「タンタタ、タンタタ」のリズムに乗って弦楽器が弾く、ビゼーの歌劇『カルメン』の有名な「ハバネラ」を想起させる甘美な旋律が第2主題である。これらが緊迫した世界を構築していく。最後はチェレスタの半音階的なパッセージの反復で楽章は瞑想的に閉じられる。

第2楽章（アレグレット、イ短調、3/4拍子）は、緊迫したスケルツォで、三部形式（A→B→A）。チェロとコントラバスによる厳かな序奏のあと、諧謔的な旋律が次々に現われ、グロテスクな様相を示す。中間部（B）では、独奏ヴァイオリンが民族色の濃い旋律を歌う。

第3楽章（ラルゴ、嬰へ短調、4/4拍子）は、金管楽器を除外した編成で、3つの主題をもとにした独自の形式で、精妙な美の世界が展開する（肅清の犠牲者に対するレクイエムとする解釈もある）。

第4楽章（アレグロ・ノン・トロppo、二短調、4/4拍子）では、ティンパニのリズムに乗って金管楽器が粗暴に「ラ、レー、ミー、ファー」と吹き鳴らす（主要主題）。そのあとに八分音符の刻みのリズムを背景に木管と第1ヴァイオリンがあわただしく駆け抜けていく（副主題）。これらの素材を起点としてこの楽章は構築される。途中には抒情的かつ瞑想的な場面などもあるが、最後は弦と木管が執拗に反

復する「ラ」の音を背景に、圧倒的なファンファーレが鳴り響いて終わる。

確かにこの交響曲は、苦悩を克服し歓喜に到るプロセスを描いたベートーヴェンばりの音楽ととれる。そうした「楽天主義的」な演奏解釈や聴取態度は否定されるべきではない。しかし作曲当時のスターリン政権下では肅清が激化し、ショスタコーヴィチの親族、友人、仕事仲間が次々に逮捕・処刑されていた。そんな状況で「歓喜」を歌う音楽など本当に書けようか。死の4年後の79年に西側で発表されたヴォルコフ編『ショスタコーヴィチの証言』（水野忠夫訳、中公文庫）は日本のファンにも衝撃的だった。第5交響曲の主題は「強制された歓喜」だと記されていたのである。

また、近年知られるようになったのが、『カルメン』の「ハバネラ」の引用の問題である。前述のように、第1楽章第2主題は、恋の気まぐれを語るカルメンが「ラ、ムール、ラ、ムール……」（L'amour, l'amour....; ああ恋、ああ恋とはね……）と歌う箇所を想起させるのであり、この歌のアクセントとなる「プラン・ガル・ダ・トワ！」（Prends garde à toi!; 気をつけなさい!）は、第4楽章冒頭の「ラ、レー、ミー、ファー」と重なる。ここで1934～36年に作曲者と愛人関係にあった女子学生エレナ・コンスタンチノフスカヤの存在が浮かびあがる。のちに逮捕・釈放されてからスペインでローマン・カルメンという映画監督と結婚したのだ。しかも愛称はリャーリャであり、終楽章末尾で反復される「ラ」の音（ロシア語読みは「リャ」）が彼女を示唆するとの説も加わる（この音は「ヤー（私）＝ショスタコーヴィチ」を指すとの見解もある）。——ショスタコーヴィチの音楽とそのメッセージをめぐる議論は今後も尽きないであろう。

【作曲年代】 1937年 【初演】 1937年11月21日レニングラード

【楽器編成】 ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、エス（E♭）・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部

みやざわ・じゅんいち／青山学院大学総合文化政策学部教授。著書に『グレン・グールド論』（春秋社・吉田秀和賞）、共著に白石美雪編『音楽論』（武蔵野美術大学出版局）など。訳書に『リヒテルは語る』（ちくま学芸文庫）、『改訂新版 音楽の文章術』（共訳、春秋社）など。